

2013 年度 入学 試験 問題

国 語

(試験時間 14:50~15:50 60分)

1. 解答用紙は、記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類がありますので注意してください。
2. 解答は、必ず解答欄に記入してください。なお、解答欄以外に書くと無効となりますので注意してください。
3. 解答は、HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し、訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に、マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。また、折りまげたり、汚したりしないでください。記述解答用紙の下敷きにマーク解答用紙を使用することは絶対にさけてください。
4. 解答用紙には、受験番号と氏名を必ず記入してください。
5. マーク解答用紙の受験番号および受験番号のマーク記入は、コンピュータ処理上非常に重要なので、誤記のないよう特に注意してください。

一 次の文章を読んで、後の間に答えなさい。(50点)

賢治の世界観の中心に据えられた「世界全体が幸福にならないうちは、個人の幸福はあり得ない」というテーゼについて吟味してみることにします。この考えは一種の万民平等思想だとみられがちですが、賢治は平板な理想としてそれを語っているわけではありません。テーゼの背後には、犠牲の精神がなければこの目的は達せられないよ、という認識が横たわっている、そういう賢治の重いジッセン⁽¹⁾的な認識が息づいています。もちろん単に美しいヒューマニスティックな言葉などではありません。そのことを物語の形で表現したのが賢治の仮想的自伝ともいえるべき「グスコブドリの伝記」です。

イーハトーヴ⁽²⁾の樵の子どもとして生まれたグスコブド리는、冷害による一家のリサン、干ばつや火山噴火などの自然災害を経験して育ちます。やがてイーハトーヴ火山局の技師となって火山噴火被害の軽減や人工降雨を利用した施肥などを実現させますが、最後に冷害による農民の危機をどう救うのかという難問に直面します。その結果、火山島を爆発させるしかないことになるのですが、爆発のスイッチを押す最後の一人だけは犠牲にならない。グスコブド리는犠牲になることを志願します。すると火山が爆発し、気温が上がって冷害の危機から脱することができる、そういう筋書きです。

いま改めて注目すべきなのは、この犠牲者の存在です。グスコブド리는その「世界全体のなかに含まれる」個人なのかどうか。私には、賢治のなかではその犠牲者が世界全体のなかに予定調和的に含まれているとはとても思われない、それどころか最後の最後までずっと「世界」と「個人」は矛盾の関係として残ったと考えています。何らかの犠牲抜きに危機を解決できない、理想を実現できない、そういう問題意識にもとづく決断を抱え続けていた。それは宗教的信念に発してそうなるのか、科学的合理主義にもとづいてそうなるのか、という問いを伴います。科学的合理主義の立場からは犠牲というテーマは出てきそうにないでしょう、検証できない領域ですから。科学者賢治としては一種の万民平等主義に立ちながら、それをいかにジッセン⁽³⁾するのかわりと進み出る。科学と技術の体系を「暗い科学」にしないためには、それを利用・実現する上で宗教的信念とジッセン⁽⁴⁾をヒッス⁽⁴⁾のものにするはずだと考えたのではないか。賢治はそうした難題に終生こだわり苦しみ抜いた男だと私には思えるの

です。

そこで「雨ニモマケズ」に触れざるを得ないことになります。皆さんよくご存知の詩ですが、引用しておきます。

雨ニモマケズ

風ニモマケズ

雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ

丈夫ナカラダヲモチ

慾まぐハナク

決シテ瞋いかラズ

イツモシズカニワラツテキいル

(中略)

ヒドリノトキハナミダヲナガシ

サムサノナツハオロオロアルキ

ミンナニデクノボートヨバレ

ホメラレモセズ

クニモサレズ

サウイフモノニ

ワタシハナリタイ

東西南北に走り回り、その持ち前の犠牲的精神をつらぬいて世界の苦しんでいる人々を助け、最後は「テクノボー」と呼ばれ

人間像を持ち出して、それに同一化したという。その「デクノボー」とは何かといえば、従来の解釈では結論的には仏教の菩薩説、或いはキリスト教の十字架で人類の犠牲になるイエス説が代表的なものです。しかし私はそれらを採りません、それは違う考えに傾いています。モデル問題としては齋藤宗次郎（花巻で活躍したキリスト者。内村鑑三の最愛の弟子といわれる）のことがあります。その齋藤宗次郎の影が色濃く落ちていることは確かでしょうし、菩薩の観念もイエスの観念もそれぞれ影を落としているでしょうが、それだけでは不十分だと考えます。また、この詩が書かれた手帳には、詩の前後に「南無妙法蓮華經」のお題目が配されていることも注意すべきところであり、また、

そういうことを前提にしての話ではありますが、その「デクノボー」を解釈する上で二つの作品が参照されるべきだと私は思っています。「よだかの星」と「なめとこ山の熊」です。

よだかはくちばしが大きく、虫を食べないと生きていけないことを悲しんでいる鳥です。その苦しみから脱するため虫を食べずに口を閉じて空高く飛び続け、最後は星になったという美しい話です。賢治はそこで、よだかが死んだとは書いていない。これは生きものというものに宿命的にとりついているジレンマをテーマにした物語だと言えます。よだかも虫たちも平等に生きて、これが「世界全体の幸福」ということの意味です。究極的にはしかし、虫が生きたためにはよだかは死ななければならぬ、そうでなければ虫たちの幸福が達成できない。そこで、賢治は慎重によだかは死んだとは言わない、星になったとするわけで、それは詩人の優しい選択、悲しい⁽⁵⁾クジユウの選択だったといっているでしょう。

「なめとこ山の熊」はどうか。熊を殺すことをなりわいとする猟師の小十郎。その熊狩りの名人にしても熊を殺すのは苦しいことであって、殺す度に「お前を殺さなければ俺が生きていけない」と弁解します。ここでもよだかと同じテーマが反復されています。小十郎は熊に向かって「今度生まれてくるときは熊なんか生まれくるな」といいます。と同時に「最後には俺の体はお前さんにやるよ」と言い、やがてその言葉通り、熊の巣穴に行つて小十郎は死にます。そのあと、熊たちは遺体を山の頂に運んでお祭りをする。

世界全体が幸せになるためには、やはり誰かが犠牲にならなければならない、という主張がここでも繰り返されている。その

ような問題意識を提出してから、賢治は、もしも誰かが犠牲にならなければいけないのなら、自分がその犠牲になろうという。このような生き方は、往生思想として考えれば、捨身往生の一種といえるでしょう。

世界全体と個人の幸福が同時に達成できないという矛盾にとりつかれながらも、それを解決できずにいる困難な心身の状況のなかで、賢治の病状はしだいに悪化して、余命いくばくもない状況に陥ります。近づく死の自覚のなかで、賢治は「雨ニモマケズ」を書き、その深い苦悩のなかで「デクノボー」の言葉があらわれるのです。私は、賢治のそのときの意識が、「もう人間であることは嫌だ」「人間であることをやめたい」という思いに包まれるようになっていたと思いますし、その行き着いたところがデクノボーだったと考えています。ある意味で人間のあり方に絶望した、ということができるかもしれません。その気持ちを詩人として美しいイメージに置きかえたのが「デクノボー」という言葉だったと思います。

賢治は父親に遺言して豪華本『国訳妙法華経』一〇〇〇部を作って親しい人に渡すように頼み、それは実現されました。そういう願いのなかにいる賢治は、法華経往生を遂げようとしているのだといえます。しかし同時に、他人を犠牲にしてしか生きられない人間の宿命、運命、業のなかでもがき苦しんでいて、死を間近にして、はじめてスツと人間であることを止めてこの世を去る、そういう意識が働いていたのではないのでしょうか。

自分を木偶のごとき存在と見なして死んでいく。それが「デクノボー」往生ということです。大乘仏教ですから、法華経往生は利他の行為ということになるでしょう。しかし、賢治自身の自利はむしろこのようなデクノボー往生だったのではないのでしょうか。それは、⁽⁶⁾悲劇的であるほかない人間の条件から逃れる、という自利の姿だったのでないか。私はそういう賢治の悲しい願望があの詩には込められていると思います。

デクノボーの姿を自利と利他を超えた境地というのは美しすぎる解釈であって、究極的に言って、賢治の死にたいという心の動きも自利だったのだと思います。仏教はそのことを苛烈に見抜いていて、美しい行為がいくらでも物語として語られてはいるけれども、そこには自利の觀念がまつわりついているのではないか。親鸞の言葉でいえば「はからい」が働いていることになるでしょう。

賢治が亡くなるのは昭和八年のことです。昭和二年からの世界大恐慌の影響による不景気と、打ち続く東北大飢饉ききんのために社会的不安が醸成されていた時代でした。昭和二年には芥川龍之介が「ぼんやりした不安」から自殺しています。あれはいまでいう孤独死なのだと思います。当時のメディアでは神経衰弱による自殺とされましたが、今日の言葉でいえば、ウツです。そういうウツの気分は賢治にはなかったでしょう。しかし、この二人の「死」のあいだには不思議な共鳴音がひびいているような気がします。というのも、たんなる(7)的な意味ではなく、賢治と龍之介の二人に共通する精神的基盤には、日本の風土に育まれてきた「涅槃願望」と呼ぶべきものが伏流しているように感じられるからであります。フロイトのタナトス(死の欲動)を参照するまでもなく、人間には死へと向かう無意識的シヨウドウ(8)があります。人間個々人には上り坂の時代と下り坂の時代があつて、ピークを過ぎると「涅槃」の世界に向かつて下っていく心の傾きがあるということです。四季をめぐる自然の移り行きの観念がまずそのようなリズムの繰り返しからできていますし、「社会」も「文明」もみなそうです。宗教は永遠の世界を説きますが、それは社会や文明が興廃を繰り返して、滅びが不可避であるからこそ、その有限性の自覚を迫り、永遠を掲げざるを得ない性格をもっているからです。

西欧の涅槃願望ともいえる終末論は悲劇的破滅を予想させますが、日本列島文化のなかで無常観に支えられた涅槃願望はむしろ甦よみがえりの思想に帰着すると思います。これは大変な違いだし、無常観の凄すまいところでもあります。芥川の自殺の底にはこの涅槃願望があり、賢治の場合も同じであつただろうと思うのです。どうしようもない人間の業という矛盾を突きつめながら、シレンマにもがき苦しんで、無常観と涅槃願望にしたいに近づいていく。そのギリギリの場面で、賢治は自分をテクノボーと見なしたと思うのです。⁽⁹⁾そのとき、あらゆる悩みと苦しみからすーっと解放されたれ、身と心の実在感も消えていったのではないでしょう。か。「サウイフモノニワタシハナリタイ」テクノボー往生だつたと言えらると思います。

繰り返しになりますが、単純に利他の法華経往生だけで死んだ賢治、という見方はやはり不十分なんです。テクノボー往生によって解放された賢治がそこには確かに存在して、その(10)のなかに賢治の最期があつたと見るべきでないか、そう理解したいと思います。宿業ともいうべき矛盾の苦悩を真剣に抱え込んでしまつたら、人間は生き得ないのではないのでしょうか。

どこかでごまかさない生きられない。苦悩をもたらす問題機制そのものを廃棄・無化することに向かわざるを得ないでしょうし、涅槃願望はそれを後押ししたことでしよう。

(山折哲雄「現代の往生試論」『atプラス』二〇一一年五月号)による)

注 法華経往生……仏教經典の法華経を信じて死すること。 涅槃……死も含む、煩惱が消滅した境地。

〔問一〕 傍線(1)(2)(4)(5)(8)のカタカナを漢字に改めなさい。(楷書で正確に書くこと)

〔問二〕 傍線(3)「科学と技術の体系を「暗い科学」にしないためには」とあるが、なぜ科学と技術の体系が「暗い科学」になるのか。その理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 過去の歴史が示すように、科学技術はこれからも大量破壊装置の開発に利用されるかもしれないから。
- B 合理主義的な科学技術は、全体に対する個人の犠牲というような人間心理の問題を解明できないから。
- C 高度に専門分化した近代科学技術は、人類の幸福に対する自らの責務を確定することができないから。
- D 科学技術は本来万民の幸福を目的とするが、その恩恵にあずかれない者の存在は忘れられるから。
- E 科学技術は人間の価値判断の問題に関わらず、したがって倫理的な行動への指針を示さないから。

〔問三〕 傍線(6)「悲劇的であるほかない人間の条件」とあるが、これと同じ意味を表す語句を本文中から探し出し、二十文字以上三十文字以内で答えなさい。最初と最後の五字を記入すること。(句読点、かつこも一字に数える)

〔問四〕 空欄(7)(10)に入れるのもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- (7) A 表層 B 心情 C 伝記 D 象徴 E 社会
- (10) A 自覚 B 悟り C 揺れ D 対比 E 歩み

〔問五〕 傍線(9)「そのとき、あらゆる悩みと苦しみからすーっと解放たれ、身と心の実在感も消えていった」とあるが、どう

いうことか。その意味としてももっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 理想の実現に向けて苦闘する心身の闘いの極致において、平安な無我の境地に到達したこと。
- B 利他の生き方に挫折する中で自己を無力な存在と位置づけた結果、安らかな最期が訪れたこと。
- C 宿業として人を拘束する現世の種々の利害関係から最終的に解放されて、静かに死に赴いたこと。
- D すべての人やものとの関わりが死によって断ち切られてゆく中で、静かに臨終の時を迎えたこと。
- E 自己の生を優先し他人を犠牲にする保身の生き方から解放されて、心身が安らかになったこと。

〔問六〕 次の文を本文中に入れるとすればどこか。もっとも適当な箇所を、その直後の文の最初の五字で答えなさい。(句読点、

かつこも一字に数える)

他人のために真実犠牲になって死ぬ人は確かにいます。けれど、それは人間の行為として本当に稀なことだと思いま

す。

〔問七〕 次の文ア～オのうち、本文の趣旨と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

- ア 宗教と科学は基本的に相容れないものであり、一科学者だった賢治は終生それに悩んでいた。
- イ 賢治にとって「デクノボー」という言葉は、利他的で犠牲的な生き方の象徴的イメージであった。
- ウ 賢治は最終的には幸福の実現をめぐる、世界と個人の克服不能のジレンマを回避しようとした。
- エ 人間の宿業の問題に悩んだ賢治は、伝統的な無常観にもとづいた涅槃思想に解決を見出した。
- オ 宗教は本質的に、この世のすべての生命現象が支配される流転の現実を超越する次元を提示する。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(20点)

男女の関係は、出産、育児を通して世代の継承という重要な問題に関わる。それは、生産関係による差別とは次元が異なる。次世代を生産し、種を継続するという点では、物の生産以上に重要な意味を持つ。性交による出産が、子孫の繁栄だけでなく、生産物の豊饒の象徴ともなることは、民俗行事にしばしば見られるところである。実際、子孫が繁栄することは、それだけ労働力を増すことになるのであるから、実質的に生産力を高めることにもなる。

子孫の形成という点からみる時、自然的に男女の分業がなされ、それを交換することはできない。とりわけ出産という大きな役割は、女性のみが担当するものであり、それに伴う身体的負担はきわめて大きい。それだけの負担を負うことによって、女性がそのぶん男性よりも優位に立つかという点、実際には逆になる。それは、あたかも物の生産において、実際に生産する生産者の階級(例えば、奴隷)よりも、生産には携わらない階級が、より上位に立つのと同様である。実際に生産に関与しない階級は、生産の束縛をはなれた余暇を自由に使うことで、階級的な優位を得て支配権を握るとともに、新しい文化を開拓することができ。こうして、高度化した文化において、男性が優位に立つことになる。あらゆる人の平等を謳ったルソーやフランス革命においても、じつは平等なのは男性に関してのみであって、女性は家庭に束縛される存在として、その地位が低いことは、当然の前提とされていた。

宗教や哲学の領域も、男性優位の上に成り立ってきた。著名な哲学者や宗教家はほとんど男性である。それは、これらの領域で女性の能力が劣るというわけではなく、公的な領域を男性が独占し、女性の関わる生活領域を私的次元に押し込めて、蔑視し、隠蔽してきたことによる。こうして問題は重層化する。

もっともすべての場合に、優劣の上下関係が前提となるわけではない。中国における陰陽説は女性的原理と男性的原理の二元論を認め、また、仏教においては、胎藏界と金剛界の両部曼荼羅を構成する。もちろんそれは直ちに両者が対等というわけではなく、逆に中国は、女性差別の強い文化を形成してきているのではあるが。

あるいは、平安期における女流仮名文学の隆盛を考へることもできる。平安女流文学は、単に一時代を画したというだけでなく、その後の日本文学、あるいは日本文化の中核的なモデルとなり、聖典化する。そこでは、『土佐日記』に、「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり」とあるように、男のものを女がまねするというスタイルで、男が書くという、性の複雑な入れ替わりが、性の固定化を揺るがしている。

このように見るならば、男女の関係は必ずしも常に固定化して捉えられているわけではない。しかし、社会の公的な場に出るのが男であり、女はその背後を支えるという基本構造が、日本においても維持されているのは確かである。とりわけその構造は、近代になって家父長制を制度的に採用することで、より強化され、女性の役割は良妻賢母という型の中に押し込められることになった。

その中で、女たちの闘いが続けられた。特に一九一一年に創刊された『青鞥』⁽²⁾は、発行禁止やスキヤンダルの中で、「新しい女」を目指す女性たちの拠りどころとなった。『青鞥』の中核となった平塚らいてうは、創刊号に「元始、女性は太陽であった」という高らかな宣言を掲げた。それは、同じ号に出た与謝野晶子の「山の動く日來る」⁽³⁾で始まる詩とともに、女性たちの意欲と理想を如実に伝えるものであった。

もつとも、じつを言えば「元始、女性は太陽であった」⁽²⁾は、それほど分かりやすい文章ではない。例えば、「男性といい、女性という性的差別は精神集中の段階において中層ないし下層の我、死すべく、滅ぶべき仮現の我に属するもの、最上層の我、不死不滅の真我においてはありようもない」(『平塚らいてう評論集』)と言ひ、続けて「私がかつてこの世に女性あることを知らなかった。男性あることを知らなかった」というあたりになると、形而上学の迷路に放り出されるようで、端的な女性解放論から見ると、あまりに迂遠な感じがしそである。

ここには、当時流行して、らいてうも傾倒していた神智学協会の神秘主義や禅、またニーチェ主義などの影響が混然としていて、社会思想に限定された女性解放論とは異なっている。そこに、この宣言が公式主義的な解放論に留まらない魅力がある。ここでらいてうが求めているのは、男性とか女性とかいう現象的な差別を超えた人間の本来性である。ところが、性的差別

のもとで、女性は本来の人間性を發揮できる可能性をつぶされている。自立できず、男に依存する「月」になってしまっている。女性もまた、男性と同じように、男性とか女性とかいう制約を超えた本来の自己を、發揮できるようにならなければいけない。それは、決して女性が男性の真似をすることではない。「私はむやみに男性を羨み、男性に真似て、彼らの歩んだ同じ道を少しく遅れて歩もうとする女性を見るに忍びない」。女性は女性としての進み方がある。だが、それは具体的にどうということなのだろうか。この宣言では、未だそれは明確に自覚されていない。

らいてうの思想は、年下の恋人奥村博と同棲し、やがて出産育児を経験することで深められる。「個人」としての生活と「性」としての生活との間の争闘について」（一九一五年の論文）において、はじめて「人間としての、または個性あるものとしての婦人を解放するのみならず、女性として婦人を解放せねばならぬという問題」に直面する。それは、「愛の生活を営むものとして家庭をつくり、子を産み、子を育てようとする婦人の生活」の発見であり、それを「婦人の天職」としてまっとうできる道を探めようとする。

だが、それは女性を再び「産む性」に固定化し、良妻賢母として家庭に引き戻すことになりはしないか。実際らいてうは、「婦人を今日の家庭生活における義務から脱せしめ、社会の人として経済的独立を有するものとしなければ」ならないとする婦人論者に対して、「母たることのなかに最も高く美しき調和ある婦人の真生活を発見」しようという、エレン・ケイの主張に共感を示している。このことが、後にらいてうと与謝野晶子の間で母性保護論争として争われるものになる。らいてうが、妊娠・出産・育児期の女性に対して国家の保護を求めたのに対して、晶子はそれを批判して女性の自立を主張し、さらに山川菊栄の社会主義的な女性解放論も絡んで、大きな論争に発展した。

(3) このように、性の問題は男女間の問題だけでなく、出産・育児を通して、新たに誕生した子供とどのように関わるか、という大きな問題を含むことになる。それは、私的領域の中に押し込められていた問題が、じつは私的領域に留まらないことを示している。男性／女性、親／子、公／私など、単純な二項対立の固定した図式でなく、より柔軟に捉えられなければならない。

（末本文美士『哲学の現場』による）

注 胎蔵界……真言密教の本尊、大日如来の理性の面。 金剛界……大日如来の知徳の面。

曼荼羅……仏の悟りの境地を体系的に配列・図示したもの。

神智学協会……ブラヴァツキー夫人とH・S・オルコットが一八七五年に創設した。神秘的直観によって神や物事の本質に触れようとする思想を基盤とした。

〔問一〕 傍線(1)「問題は重層化する」とあるが、その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 女性の役割は子孫の繁栄という生物的生産にのみ限定されている結果、男性が社会的に優位に立ち高度な文化を担うということ。

B 男性は公的領域で上位にあっても出産能力は女性にのみ具そなわっているように、男性と女性の役割は本来複合的であるということ。

C 男女の平等は子孫の繁栄という生物的生産性を根本とすべきなのに、社会的な優劣の発生がそれを崩壊させつつあるということ。

D 男女の関係は男性と女性の生来的な差異と役割だけでなく、そこに社会的な差異と役割が結びつくことで形成されるということ。

E 男性と女性の間には能力の上下関係だけでなく、そこに両者の対等性や複雑な入れ替わりの問題が関わってきているということ。

〔問二〕 傍線(2)「じつを言えば「元始、女性は大陽であった」は、それほど分かりやすい文章ではない」とあるが、その理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A らいてうの思想は、男性と同様の経済的独立を求めようとはせず、家庭における生産的性としての母親たろうとするものだから。

B らいてうの思想は、紋切り型ではない形而上学的な女性解放論を形成するために、神秘主義や西欧思想を取り入れたものだから。

C らいてうの思想は、社会的男女の平等を、男性を真似ることではなくその女性性を貫き通すことで達成しようとするものだから。

D らいてうの思想は、禅やニーチェ主義の影響を受けて、女性独自の生き方を求めながらもその具体的解決を回避するものだから。

E らいてうの思想は、男性・女性という制約を超えて、人間の本来性に立ちかえることにより女性を解放しようとするものだから。

〔問三〕 傍線(3)「大きな問題を含む」とあるが、その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 女性解放に関する問題は、男対女、家庭対社会という図式の内部にとどまらず、出産・育児の領域にまで及んでいくということ。

B 出産・育児という問題は、女性から経済的自立を奪い、良妻賢母として再び家庭内に追いやる反動性を内包しているということ。

C 本来、個々の男女間の問題であるはずの出産・育児は、実は国家の問題としても取り扱われるべき性質を帯びているということ。

D 男女の性の問題は、新たに誕生した命をめぐって、経済的独立の立場に立つ女性解放論者との論争へと発展していくということ。

E 男女の関係の問題は、出産・育児という経験がさしはさまれることで、社会的な問題へと思考の枠組みを広げていくということ。

〔問四〕 次の文ア～エのうち、本文の趣旨と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

A 出産と物の生産とは性質が異なるが、生産の束縛を離れた階級が優位を得、他方を支配する構造を持つ点は同等である。

I 女性を男性から解放するという考え方自体、男性の優位性を暗に認めており、女性の地位向上を遅らせる原因となっている。

ウ 中国の陰陽説にくらべ、日本の平安女流文学は性の固定化を揺るがしていた点で、近代性的の問題を先取りしていた。
エ らいても与謝野晶子も、女性の社会的な解放を目指すのみならず、人間的解放を求める考えにおいては変わらない。

三 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(30点)

奈良の都に八重桜と聞こゆるは、当ても東田堂の前にあり。そのかみ、時の后、上東門院、興福寺の別当に仰せて、かの桜を召されければ、掘りて車に載せて参らせける。

ある大衆のなかに見合ひて、事の子細を問へば、「しかじか」と答へけるを、「名を得たる桜を、左右なく参らせらるる别当、返す返す不当なり。僻事なり。かつは色もなし。」⁽²⁾ 后の仰せなればとて、これほどの名木をいかでか参らすべし。とどめよ」とて、やがて貝を吹き、大衆を催してうちとどめ、「别当をも払ふべし」⁽⁴⁾ などまでののしりて、「この事によりて、いかなる重科にも行はるれば、我が身張本に出づべし」⁽⁶⁾ とぞいひける。

この事、女院聞こしめしたまひて、「奈良法師は心なき者と思ひたれば、わりなき大衆の心かな。まことに色深し」とて、「さらば、我が桜と名づけん」とて、伊賀国与野といふ庄を寄せて、花の盛り七日、宿直を置きてこれを守らせる。今にかの庄、寺領たり。昔もかかるやさしき事ありけるにこそ。

(『沙石集』による)

注 東田堂……興福寺の堂舎のひとつ。 上東門院……一条天皇中宮彰子。 别当……寺務を司る僧。

大衆……僧侶たち。 催して……招集して。 払ふ……追放する。 重科……重い罰。

庄を寄せて……莊園を寄進して。

〔問二〕 傍線(1)「左右なく」、(2)「色もなし」、(3)「いかでか参らすべし」、(5)「ののしりて」の解釈としてもっとも適当なものを、左の各群の中から選び、それぞれ符号で答えなさい。

(1) 左右なく

- | | | | |
|--------|--------|--------|------------------------------|
| D | C | B | A |
| ためらわずに | 大いに喜んで | 時期も選ばず | 類 <small>たぐい</small> 無きものとして |

(2) 色もなし

- | | | | |
|-------|-------|------|------|
| D | C | B | A |
| 猶子もない | 謝礼もない | 花もない | 趣もない |

(3) いかでか参らすべし

- | | | | |
|---------------|---------------|--------------|---------------|
| D | C | B | A |
| どうしたら運べるというのか | どうして差し上げられようか | どうやって差し上げようか | どうやって運ぼうというのか |

(5) ののしりて

- | | |
|---|---------|
| A | 口汚く非難して |
| B | 厳かに告げて |
| C | 大声で騒いで |
| D | すぐに断言して |

〔問二〕 傍線(4)(6)と同じ用法の「べし」(各文中の傍線で示してある)を左の中から一つ選び、それぞれ符号で答えなさい。

- A 頼朝が首をはねて、わが墓の前にかくべし。
- B ゆく蛍雲の上までいぬべくは秋風吹くと雁かりに告げこせ
- C 潮満ちぬ、風も吹きぬべし。
- D ほととぎす鳴くべき時に近づきにけり。
- E 毎度ただ得失なく、この一矢に定むべしと思へ。

〔問三〕 傍線(7)「奈良法師は心なき者と思ひたれば、わりなき大衆の心かな。まことに色深し」とあるが、これは、女院が大衆の行動に対してどのような気持ちを抱いたということか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 情趣を解さない者だと思っていた奈良法師が、思いがけず素晴らしい風流心を持っていたことに感心する気持ち。
- B 分別のない者だと思っていた奈良法師が、意外にも計算高い行動を取ったことへの割り切れない気持ち。
- C 悟り澄ました者だと思っていた奈良法師に、実は深い執着心があったことを知り、あさましく思う気持ち。
- D 思慮の足りない者だと言われていた奈良法師が、やはり割に合わない行動を取ったことをおもしろがる気持ち。
- E 何事にも動じないはずの奈良法師が、どうしようもない恋の思いにとらわれたことに同情する気持ち。

〔問四〕 傍線(8)「かかるやさしき事」の「かかる」が具体的に指す内容として、適当でないものを左の中から一つ選び、符号で

答えなさい。

- A 上東門院への八重桜献上を、興福寺の大衆が名木だからと留めようとしたこと。
- B 八重桜を献上しようとした別当が、大衆に追放されそうになったこと。
- C 大衆の一人が、この行動が罪に問われたら自分が罰せられようと述べたこと。
- D 上東門院が、八重桜をめぐって起きた一連のできごとに理解を示したこと。
- E 上東門院が八重桜を「我が桜」と名づけ、花盛りに宿直を置いて守らせたこと。

〔問五〕 次の文ア～オのうち、本文の内容と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

- ア いま東円堂にある八重桜は、上東門院に献上した八重桜の後に植えられたものである。
- イ 大衆たちを扇動して桜の運搬を阻止しようとした大衆の一人は、事件の張本人として罰せられた。
- ウ 上東門院は、宮中に植えた八重桜を「我が桜」と名づけた。
- エ 八重桜の花盛りに宿直を置いたのは、これ以上大衆が我が物顔でふるまわないようにするためである。
- オ この一件で、伊賀国与野庄は興福寺の寺領となった。

